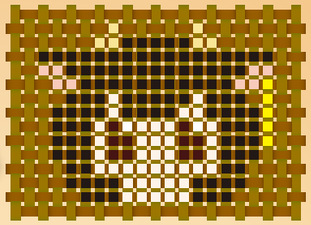
高住宮ノ谷遺跡
たかずみみやのたにいせき
＆高住牛輪谷遺跡
たかずみうしわだにいせき



古墳時代の編み物発見！

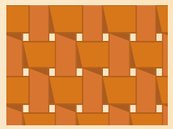
高住牛輪谷遺跡の発掘調査も佳境を迎えています！現在、調査区中央部を走る溝を掘り下げているところですが、この中からまたまた面白い遺物が発見されました。

見つかったのは、古墳時代終わり頃（約 1,400 年前）の編み物です（写真）。断片なので、全体の形状が不明ですが、おそらくカゴの一部と考えられます。タテとヨコの素材を丁寧に交互に編み込んであり、「イイ仕事」がしてあります。

ところで、筆者も古代人と同じようにカゴを編みました。最近現場で使用しています。みなさんもいかがですか！

出土した編み物→

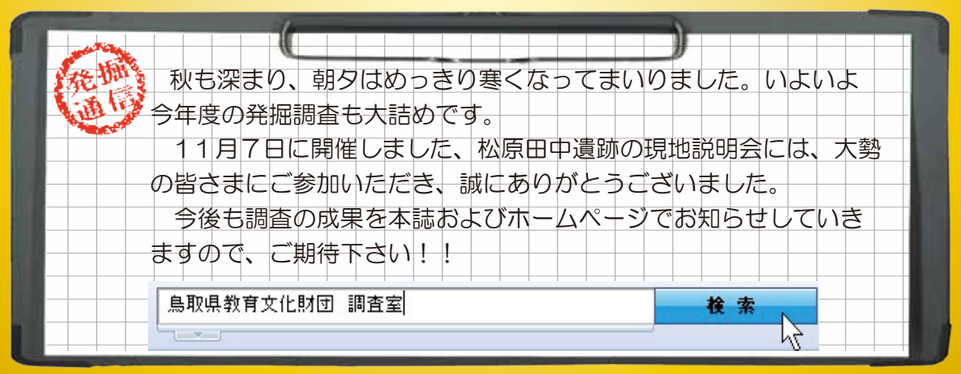
タテとヨコの素材を交互に編んでいることが分かりました。



【模式図】

古墳時代終わり頃の溝の中から出土しました！

（オマケ）
筆者作成のカゴ（黄色）



（公財）鳥取県教育文化財団　調査室

〒680-1133　鳥取市源太 12 番地

TEL：0857-51-7553　　FAX：0857-51-7550

メールアドレス：tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP：http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu new.htm

第 79 号　2015 年 11 月 20 日

今年度の発掘調査でもいろいろな木製品が見つかり、その中には、現代のものと基本的に形状が共通するいにしえの農具も含まれていました。

現代までつながる農具の形！

写真１は、今年度の高住牛輪谷（たかずみうしわだに）遺跡の発掘調査で見つかった古墳時代終わり頃（約 1,400 年前）に使われていた木製品の一部ですが、一体何だか分かりますか？

写真１　高住牛輪谷遺跡出土木製品

形は細長い半月状で、下側には三角に尖るギザギザの歯が数多く削り出されています（写真２）。また、四角形の穴が中央部分に１つあり、発掘調査では見つからなかったものの、そこには長い柄が付いていたはずです。こう言えば農作業をされたことのある方は、材質が木製とアルミ製という違いはありますが、写真３のように山形の歯がつく現代の農具が思い浮かぶのではないでしょうか。

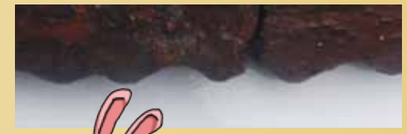


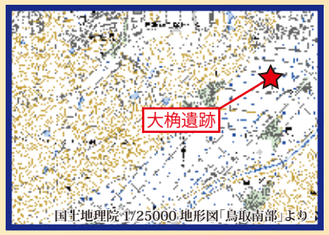
写真２　木製品の部分拡大

写真３　現代の机（アルミ製）

これは机（えぶり）と呼ばれる農具で、土（田んぼ）を均すのに使っていました。縄文時代終わり頃（約 2,500 年前）に大陸から水田稲作の技術が九州地方に伝わった時に、田んぼを耕すための鍬や鋤、田んぼに沈み込まないための田下駄（第 57 号参照）、稲の穂を収穫するための石庖丁（第 74 号参照）などの農具類と一緒に伝わってきたと考えられています。

鳥取県にいつ机が伝わったのかはよく分かっていませんが、これまでに行った松原田中遺跡の発掘調査で、弥生時代前期終わり頃（約 2,300 年前）の溝から作りかけの鍬が見つかっていますので、その頃には伝わっていたのかもしれません。

大楠遺跡
だいかくいせき

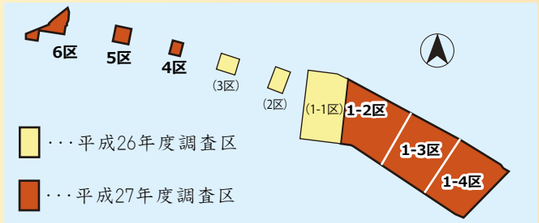


平安時代（約 1,200 年前～ 800 年前）の川を掘り終えた私たちを待っていたのは、さらに古い時代の川でした・・・。

奈良時代（約 1,300 年前）の川からは、形代（かたしろ）などの木製祭祀具をはじめ多くの木器が出土しました。古墳時代（約 1,700 年前～ 1,400 年前）の川では、梯子（はしご）などの大小さまざまな木製の建築部材（建物などの一部）が出土しました。

これまでの調査で、古墳時代から平安時代まで川が少しずつ位置を変えながら流れ、その周辺では人々が生活していたことがわかりました。

この先の調査では、何が私たちを待ち受けているのでしょうか？今後の成果をお楽しみに！



古墳時代の川から出土した梯子

奈良時代の川から出土した木製祭祀具群

1-3区・1-4区の境界部分で、弥生時代前期（約2,400 年前）の川の跡が見つかりました。

この川は砂で埋め尽くされており、遺物は土器片がわずかに出土するだけ・・・。「こんな環境では弥生人の活動の痕跡（こんせき）が残ってないかもなぁ」と思ったそのとき、川底の黒い土に白いものが規則的に並んでいることに気がつきました。この場所には、まさしく弥生人の足跡（あしあと）が刻まれていたのです。

川の中を歩く弥生人？

川の中に残された弥生人の足跡

松原田中遺跡
まつばらたなかいせき

現地説明会を行いました！

松原田中遺跡では、11 月7日（土）に現地説明会を開催し、97 名の参加者がありました。

当日は、調査区内で地中梁（ちちゅうばり）を持つ布掘建物跡（ぬのぼりたてもの）や大型の掘立柱建物跡（ほったてばしらたてもの）を間近に見ていただきました。

またこれまでの発掘調査で見つかった遺物や、遺構の写真パネルなども合わせて展示しました。

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました！

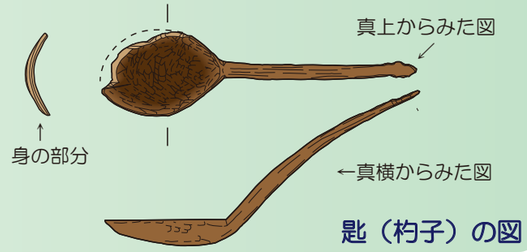
現地説明会の様子

続々と見つかる木の道具たち

様々な木の道具が見つかっている松原田中遺跡。今回は現地説明会でも展示した匙（杓子）（さじ しゃくし）をご紹介したいと思います。

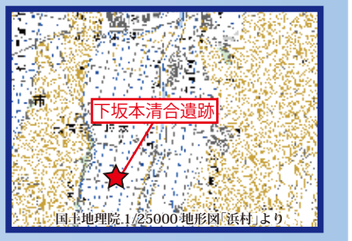
下図の匙（杓子）は今年度の調査で見つかったもので、長さ 21 ㎝、柄が急に立ち上がることから、現代で言う「おたま」のような道具と考えられます。

時期は不明ですが、現代のお店でも売っていそうな出来栄えです。今も昔も匠の技はスゴい！！



匙（杓子）の図

下坂本清合遺跡
しもさかもとせいごういせき

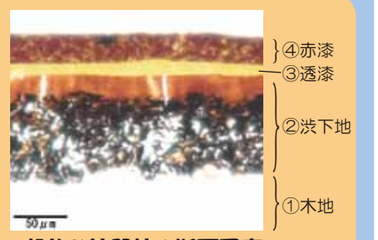


金色の漆器椀の正体は！？

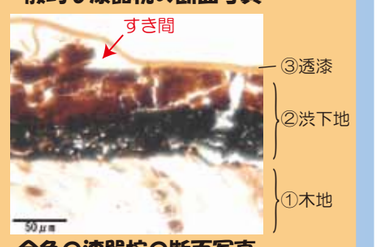
今年のお便りの３月号（第 71 号）で、「金色に塗られた？漆器椀」（右上写真）をご紹介しました。この金色の謎を解き明かすべく科学分析を行った結果、なんと金は検出されず、しかも他に出土しているものと同じ作りの漆器椀でした。でも、どうしてこのお椀だけ金色に輝いて見えるのでしょうか？

右の２枚の写真は漆器椀の断面の顕微鏡写真です。上が下坂本清合遺跡の一般的な漆器椀、下が金色の漆器椀です。①木地の表面に炭の粉を混ぜた柿渋を塗って黒い下地（②渋下地（しぶしたじ））を施し、その上に漆（③透漆（すきうるし））を塗ることで、つやのある黒色を出します。この上から漆に顔料（水銀朱（すいぎんしゅ））を混ぜた④赤漆を使って模様が描かれます。金色の漆器椀のほうは、写真の左側で透漆の層が下地からはがれて浮いています。この部分にあたる光の反射の具合で、漆本来の色である黄色を発色し、光沢をおびて金色に見えたというわけです。

長い年月の間地中に埋もれ、劣化したことによる偶然の産物のようですが、どんな条件が揃えばこうなるのか、その解明が今後の課題です。



一般的な漆器椀の断面写真



金色の漆器椀の断面写真